

五 総括

まず、「癩」の家筋認識の成立と展開について。「癩」が家筋であるという認識は、医学書や在地の史料の中に17世紀後半から登場する。やがて18世紀には浄瑠璃の中にもこの意識が確認できるようになり、庶民レベルにまで広がっていったことがうかがえる。

それは医学理論として見たとき、中国医学とは異なる日本近世医学独自の展開であった。日本医学と社会がこの時期に「癩」を「家」に伝わる病と考えたのは、ひとつには中世に比して患者数そのものが減少し、「癩」の家族性発病傾向が目立ったためだろう。さらに17世紀後半以降、社会全体が「家」という枠組みで人を掌握する傾向が定着していったことも影響した。

「癩」をめぐる差別意識については、17世紀末には、「癩」を「天刑病」と表現する医学書が登場し、また17世紀後半以降、「業をさらす」という考え方が生まれたことを確認した。やがて18世紀に至っては、「業病」「天刑の病」「三千の仏神人に憎まれたる業人」という言葉が、浄瑠璃の中で用いられるようになった。これらのことから、「癩」の「業病」観は17世紀末から18世紀にかけて、医者の間でも庶民レベルでも、定着、深まりを見せたと考えられる。この時期、都市を中心に「癩」患者の数が減っていたことが、むしろ「癩」に対する特殊視、偏見と排除の意識を拡大させたように見える。

また「天刑病」・「業病」という言葉の普及が、「癩」を家筋とみなす考え方の普及の時期と重なるのは、「天刑」や「業」が、「癩」はいったん「血脈」にとりつけば子々孫々にまで渡り、不治であるという認識と不可分であったことを示唆する。「前世の業」という中世以来の宗教的「癩」病観と、近世社会で普及した「家」に伝わる病という現世的・医学的理解とが一体化して、新たな近世の「業病」「天刑病」観が形成されたのである。

差別意識には都鄙の差も確認できた。先に見たように片倉鶴陵は、田舎では「癩」の子孫との婚姻を拒否するが、都市では少ないと述べている。これは都鄙における「家」に対する意識の違いや、浄瑠璃などを通じて観念のレベルで「癩」に対する差別意識が刷り込まれているものの、都市生活の中で「癩」患者との接触が殆どないため、「癩」に対する現実感が希薄であったことなどが背景にあるだろう。また前掲松田源徳『治癩訓蒙』（1886年）が、「下等社会」は「癩」患者の結婚も「珍事」ではないと述べているのは、差別意識には身分・階級による違いもあったことを示唆している。

差別意識に地域や身分・階級による差異があったように、「癩」患者の生活形態も一括りで論ずることはできない。ただ、物吉や「癩」身分に編成された人々は、数としては少数派である。患者は「家」で扶養されることもあれば、共同体が援助の手をさしのべる場合もあり、またその逆に共同体によって遺棄されることもあった。排除の度合いは、基本的には家筋というレッテル・経済的負担・病状を、「家」や共同体がどう受け止めるかによって決まる。

明治期、医師後藤昌文が、従来患者は家庭で幽閉されるか巡礼に出るしかなかったと排除を強調し、同じく医師佐伯理一郎が、かつて京都で「癩」に罹っている医者と人々が平気で会食していたと非難するような、相反する言説が見られるのもここに所以する。いずれにせよ近代のように伝染を盾にした絶対的排除の論理が働かないため、排除の仕方も例えば「癩者」の勧進が町中で行われ

たように、近代ほど徹底的なものではなかったろう。

存在形態は多様ではあるが、近世は病人遺棄については一定の歯止めをもつ社会であった。それは幕府や藩が、乞食対策の一環として「癩」乞食を「癩」身分に編入したり、仁政を示すために行路病人の村送り体制を敷き、病人をはじめとする社会的弱者に対する保護政策をとっていたことが示している。病人介護を家庭内で行うことを奨励する孝子褒賞に見るように、仁政遂行の末端に民を動員する傾向は見られるようにはなるものの、近世という時代は制度として病人遺棄を許さない時代だったことは確認してよいだろう。

明治初年、身分解放令や勸進禁止、廃仏毀釈の中、北山十八軒戸や京都物吉村、そして各藩の「癩村」の「癩者」が離散する。しかし明治政府や社会は、それを問題にした形跡はない。むしろ働かずに勸進で生計を立てる物吉の消滅は、社会から歓迎・当然視された。一旦忘れ去られていた北山十八間戸に人々の目が向けられるのは明治35年、「浮浪癩」問題が浮上する中、京都の医師佐伯理一郎が、光明皇后ゆかりの場としてここに再び「癩病者」を收容しようという呼びかけを始めた頃からである。

中世や近世社会において、北山十八間戸という宗教的施設に「癩者」を收容し、勸進権を認めたのは、中・近世社会の生産力に応じた一つの共生システムとしての側面を持つ。しかしながら近代という歴史段階において、強制的に隔離施設に收容していくことは、その生産力や人権意識、医学の発達レベルに全く対応しない処遇であることを、佐伯は理解していない。

同様に、歴史の発展段階を無視して、近世社会の「癩」患者と近現代社会の療養所のハンセン病患者の生活を比較し、どちらがより「悲惨」かとか、「差別的」であるかなどを論ずることも無意味だろう。が、そのような歴史の発展段階の差をさしおいてもなお、近世において地域や共同体、各家のありように応じた生活をしていた患者を、近代国家が「癩」を強烈な伝染病と宣伝して強制收容を続け、人々の意識と社会システムを絶対的排除へと一元化していった事実は、重く受け止めなければならない。

【調査対象医学書一覧】

年	書名	著者	病因・治療法など
1456	延寿類要	竹田宗俊	1793年上梓、飲食相反ゴリとキジ
1544	授蒙聖巧方	曲直瀬道三	風因・房勞・肉食による
1574	啓迪集	曲直瀬道三	治療法：汗・吐・下・瀉血、禁忌と精神論の記載
未詳	医療衆方規矩 下	曲直瀬道三	
1579	南蛮流癩瘡奇方	田辺道雲	弘法大師伝、近衛家相伝、血液検査
1611	梅花無尽蔵	永田徳本	明和五年版、雷丸
1611	癩病之次第	永清	悪血を去り吉血をやしなう

第二 1907年「癩予防二関スル件」

1613	新版妙薬速効方 上下	寿仙坊見宜	虫を下す
1618	癩病治療新法	佐竹空宿	高麗伝阿蘭陀流、バテレンが伝える、白癩=物のろい、黒癩=子孫より、血を出し治療
1639	南蛮国秘方十二癩之一流	未詳	平戸で南蛮人から伝授
未詳	阿蘭陀外科明鑑抜粹上下	吉永升庵	
未詳	阿蘭陀外科正伝	吉永升庵	
1686	病名彙解	蘆川桂洲	医学入門の三因説を引く
1688	万病回春病因指南	岡本一抱	モノヨシ、陰房強剛、子孫に伝わる別伝あり
1690	袖珍医便	蘆川桂洲	飲食相反 ゴりとキジで癩に
1691	癩瘡秘方	牛山広正	悪見様事=親より子に伝、血液診断法、悪血を下し血の滞りをなくす
1693	俗解囊方集	苗村文伯	天刑の疾
1699	牛山活套	香月牛山	人間の中、天道にも放たれたる病
17c	時習録	北山友松	血液のくされから発病、家筋・肉食・月経時の交合
1728	医学正伝或問諺解	岡本一抱	癩病に悪虫ありて子孫に伝
1729	済民日用大全	太田春斎	天地の悪風による、「どす」
1729	普救類方	林良適他	肘後備急方・衛生易簡方・本草綱目引用 「癩風(かつたい)」「白癩(しろがつたい)」
1737	国字医叢	香月牛山	伝染の説明、癩は諸病の外、血脈伝染、卑賤の病、濁富の同気、不治の悪疾
未詳	校正病因考	後藤良山	父子兄弟伝染、不治、湯治で膿血を出す
1763	南蛮流癩療治秘書	貝塚氏書	朝鮮征伐の折り唐人より伝、先祖より伝・肉食・天地の殺作・出生時悪血飲む、精進潔斎
1763	建殊録	吉益東洞	狂癩癩風は「人所隠忌」ので居処姓名を除く、悪疾者多由伝継、恥辱を先祖に及ぼす
1782	癩風秘録	建部由道	建部清庵口授、異食で近時諸国に夥し、癩氣・食毒・寒邪による、天刑・血脈否定、鳥獸肉禁止
1785	理癩方	村上良庵	血液検査・尿検査
1786	癩風新書	片倉元周	毒風・食物・房勞穢汚・産後瘀血・血氣相伝等、温泉不可、田舎婚姻拒否、都会富貴問う、癩減少、告知避ける
1786	杏花園医案評	山田凶南	弟子の筆記、一大夫の妻の治験例(すでに数年患う)

1787	南山老人一家言	南園惟親	癩差別状況、病因：父母の遺毒伝染・自発、湯治・瀉血批判、食毒＝魚獣肉食、治療は正血養い瘀血を去る
1787	外療手引草	玄玄斎道人	治せず、秘事なり
1793	療治経験筆記	津田玄仙	
1796	生生堂医談	中神琴溪	吐剤・下剤・樟脳で照らし総身に三稜針
1800	療治茶談続編	津田玄仙	血脈悪しく積毒深き人風土により病む
1803	和方一千方	村井琴山	付録「癩病治方印施」容貌も心も悪くなる、不治、病因：遺伝、月水中交合
1803	蘭療方	広川獬	原題ランガレーヘンブック、病因：腐毒・食毒・父母伝承の血毒による
1804	生々堂治験	中神琴溪	薬と刺血
1807	提耳談	当莊庵	悪血
1813	陰証百問	吉益南涯	青洲：生質百癩は不治 年未詳
1814	医療察病考	篠山和順	聖人父子相伝の悪疾を天刑と憎む、浪花にない→水土説、古の天刑病と違、白癩は血脈・天刑・不治、淫欲、乳母血脈
1817	和蘭医方纂要	江馬元弘	血液と鹹液の腐壊、必嗜房事
1817	諸国古伝秘方	衣関順庵	血筋、発症前に灸
1819	成蹟録	中川修亭他録編	吉益南涯治験録：宿疾全治
1829	校正方輿輓	有持桂里	伝尸する、初生の時黒血を出せば予防
1830	医療瑣談	宇井正辰	癩の婚姻拒否、血脈説は疑問だが「世上一体の定説」、告知を慎重に、神方を旧家仏壇より入手
未詳	青州医談	華岡青州	天刑病、難治に灸・出血・温泉など皆効なし、出血は暈倒するまでしても効なく脱状に
未詳	天刑秘録	華岡青州	神仙百中散は百発百中
未詳	三朮附之弁	華岡青州	
未詳	瘍科瑣言	華岡青州	樟脳などで照らし見る
1836	杏林内省録	緒方義夫	高貴の人でも母が賤しい出のために悪疾になる
1843	簡易養生記	沼勇造	理癩新書から肉食禁忌、「癩の一門」、鳥類などを食しての癩は治しやすい
1844	眼療経験治法	森鷗樹園	癩疾眼
1846	医事叢談	山下玄門	都会に少なく山谷間に多、病因山嵐瘴気、天刑病とし治療せず捨置くを批判、病形により治・不治

第二 1907年「癩予防二関スル件」

1847	瘍科秘録	本間玄調	天刑（医学入門より）、自発は魚肉食による、血脈が多い、難治、温泉・灸治を世人は好むが否定
1848	遊相医話	森立之	難治、父母先天の遺毒、父子相伝、血脈を逐て発病、食毒の癩は治し安い
1850	究理外科則	新宮涼庭訳	白癩・黒癩・白頑癩、発汗剤内服
未詳	客中証案	高野長英	治験記に「天刑の類、難治の病」、放血
1853	癩風弁	帆足万里	大風子により10に2, 3は治る
1856	雑病広要	多紀元堅	中国医学学説整理
未詳	時還読我書	多紀元堅	上州の治癩の名医、五、六人の癩夫が奴隷となり治療を受ける、食毒の癩の例
1857	扶氏経験遺訓	緒方洪庵訳	ヨーロッパは中古癩病院のために今重症患者なし、東方癩は著しく「伝染」（病形により伝染性が異）
1871	列夫良病考	後藤昌文	血液病、長く深室に幽閉、貧人は薬を買えず深室もなく神仏霊場巡拝と称して家を出る
未詳	自準亭日診雑識	本間東軒	天刑の診察例
1886	治癩訓蒙	松田源徳	下等社会は癩者の結婚も珍事でない、沿海や寒村の屠畜者が魚獣肉食等最下等の生活で癩に、遺伝、寄生虫
未詳	癩治方一卷	大崎玄澄記	秘伝書集
未詳	癩疾方雑録	椿原山人	諸書からの秘伝
未詳	弘法大師現伝の秘薬	堯栄筆写	原本三宝院本、昭和7年写、黒癩=子孫より伝、血液検査
未詳	癩病秘伝奇方録	未詳	諸書の写し、弘法大師現伝秘薬、南蛮流癩療治秘書など
未詳	南蛮流癩病療治並製剤記	未詳	先祖よりの癩は不治
未詳	南蛮流癩瘡秘伝書	未詳	淫の切薬、孺生七日の間に死んだ者を黒焼きに
未詳	阿蘭陀外科奥抄	未詳	カスハル家伝、人の肝黒焼き薬
未詳	癩風方	未詳	諸書の写し、南蛮流など
未詳	癩病療治之書	未詳	雷丸、明治25年筆写
未詳	癩病秘法	北條先生伝	胎毒・母・悪食・風水悪血にあたる・血多者・インウン多し
未詳	湘雲瓊語附録4	未詳	甘雨亭叢書、今の癩は癩虫による

未詳	活物究理経験	未詳	治験記：貧賤の男子、告知を避け「悪キ癩」と告げる
未詳	天恵散病家心得書	未詳	癩病薬添付手引き書
未詳	癩病一流	未詳	父からの癩と母からの癩で薬方別

【主要参考文献】

塚本学『生類をめぐる政治』平凡社、1983年

藤野豊『日本ファシズムと医療—ハンセン病をめぐる実証的研究』岩波書店、1993年

藤野豊『「いのち」の近代史』かもがわ出版、2001年

藤野豊編『歴史のなかの「癩者」』ゆみる出版、1996年

部落問題研究初編『部落の歴史—東日本編—』部落問題研究所、1983年

部落問題研究所編『部落の歴史—近畿編—』部落問題研究所、1983年

細川涼一『中世の身分制と非人』日本エディタースクール出版部、1994年

松下志郎『九州被差別部落史研究』明石書店、1985年

横田則子「物吉考—近世京都の癩者について」『日本史研究』352号、1991年

横田冬彦『天下泰平』講談社、2002年